

ペトロはなぜ泣かないか（ヨハネ 18:27）

前 川 裕

1. 問題設定

「ペトロの否認」と呼ばれる記事は、四福音書全てに含まれている物語である。それらの大筋は共通しているものの、細部についてはさまざまに異なっている。特に、共観福音書の描写とヨハネ福音書のそれとの間には大きな違いが見られる。ここでは、ヨハネ福音書の「ペトロの否認」記事に関して、特にペトロに関する描写を取り上げ、そこに見出される福音者の福音書記者の意図を考察する。

2. テキスト

2.1 「ペトロの否認」記事に関する各福音書記事の比較

「ペトロの否認」記事の基本的な筋書きは、マルコ福音書にみられるもの（14:66-72）が四福音書に共通している。すなわち、ペトロがイエスの裁判の場に赴くと、人々からイエスとの関わりを3回尋ねられ、3回ともペトロが否定する。するとイエスの予告（14:30）通りに鶏が鳴く、というものである。

マタイとルカは、マルコの物語とほぼ共通する筋立てであるが、より洗練されたものとなっている。マタイとルカに共通する違いと、マタイ・ルカそれぞれがもつ独自の違いの二種類を見いだすことができる。

マタイとルカに共通するマルコとの相違点には、以下のものが挙げられる。

1) 鶏が鳴くのは、マルコでは2回であるのに対し、マタイ・ルカでは1回のみで

ある。これは物語をより劇的にする効果があるといえるだろう¹。マルコにおける1回目の鶏の声は、それほど意味を持たないと考えられるからである²。なおそれに合わせてイエスの予告の言葉も変わっており、鶏が鳴く回数については言及されていない（マタ26:34、ルカ22:34）。

2) ペトロは3回イエスとの関係を否定するが、マルコでは2回目の返答について「再び打ち消した」とし、ペトロは具体的な言葉は述べていない。しかしマタイでは「そんな人は知らない」、ルカでは「いや、そうではない」と述べており、3回知らないと言う、というイエスの言葉をよりはっきりと示している。

3) 最後にペトロが泣くのは、「外に出て」である。マルコでは「いきなり泣き出した」（14:72）とあり、その時にいたはずの「下の中庭」（14:66）において泣いたことになる。大祭司の家の中庭にいるわけであるから、突然泣き出したりしては怪しまれるはずだ、と考えたのか、マタイ・ルカではペトロはイエスの言葉を思い出すと「外に出て」（ἐξελθὼν ἔξω）から泣いている。ここではペトロの行動に冷静さが加わっているといえる。しかし泣く場面については「激しく」（πικρῶς）が追加されており、ペトロの感情がより強く示されている。マタイ・ルカそれぞれに見られる独自の描写には以下のようなものがある。

①マタイでは、最初の問いと2回目の問いを出す女中は別の人になっている（「他の女中」、ἄλλη³）。②最初の問いではイエスについて「ガリラヤの」という説明を、2回目の問いでは「ナザレの」という説明を加えている（「ナザレの」はマルコでは1回目の問い）。③マルコにある3回目の問い「ガリラヤの者だから」という説明について、マタイでは「言葉遣いでそれが分かる」と、より具体的な説明となっている。

①ルカでは、1回目に問いかけられて否定した後も出て行こうとする様子はな

1 他方で田川は、マルコが2回にすることでより劇的にしている、と考えている（田川建三『新約聖書 訳と註5 ヨハネ福音書』作品社、2013年、671頁）。

2 この点から、マルコの物語の方がより古い形であると推測することができる。

3 ἄλληだけなので「他の女性」と訳すことも可能である。KJV、ASVではmaidを斜体にして補遺であることを示している。CEBではanother womanと訳す。NETではanother slave girlと訳しつつ、注をつけてslave girlという語はギリシャ語原文にないという説明を加えている。

い (マコ14:68、マタ26:71と異なる)。②2回目の問いをペトロに投げかけるのは「別の人」(ἕτερος) であり、マルコ・マタイと異なっている⁴。③3回目に問うのは、マルコ・マタイでは「人々」であるが、ルカでは「別の人」(ἄλλος) である(22:59)。④ルカに独特の記述は、鶏が鳴いた後に「主は振り向いてペトロを見つめられた」(22:61) である。ペトロはイエスに「遠く離れて従った」(22:54) のであり、イエスがペトロを認識していたようには描かれない。しかし3回目にペトロがイエスとの関係を否定するやいなや、イエスはペトロの方を向いて見つめた(ἐνέβλεψεν)。まるで「ほら、私の言った通りだったろう」と言うかのようなのである。これは非常に劇的な場面であり、物語の緊張感を頂点に至らせる点である。

細かな違いはあるにせよ、共観福音書の物語は基本的には似通っている⁵。ところがヨハネ福音書にある物語にはかなりの違いがある。以下に列挙しよう。

- ①エピソードの冒頭で、ペトロと「もう一人の弟子」が一緒に行動している(18:15-16)。ただしこの弟子は冒頭にしか登場しない。
- ②ペトロは大祭司の屋敷の中庭にスムーズに入れない。共観福音書では、中庭に入る際のトラブルについて言及がない。
- ③ペトロに最初に問うのは「門番の女中」である(18:17)。「女中」である点は共観福音書と共通しているが、ここでは「門番」となっている。「女中」が「門番」をしているというのは奇妙な描写であるが、共観福音書の伝承と混同されたと推測される⁶。
- ④ペトロは「立って」(ἑστώς) 火に当たっている(18:18, 25)。ルカでは「座っている」とある(22:55-56)。
- ④18:19-24はイエスの裁判の場面になっている。マルコ14:70並行で「しばらくし

4 1回目の問いとは「別の人」という点ではマタイとも共通しているが、ルカでは男性名詞を用いている。

5 共観福音書に見られる伝承の相互関係はここでは扱わない。

6 ウォールドは、共観福音書の伝承を前提とした記述はヨハネ福音書の成立過程における第三段階の著者の傾向であるという(von Wahlde, Urban C. *The Gospel and Letters of John*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2010, 2:760)。

て」という部分に対応すると言える。

- ⑤2回目に問うのは「人々」と複数である（18:25）。これはマルコ・マタイの3回目に
対応する部分である。
- ⑥3回目にペトロに問うのは「大祭司の僕の一人で、ペトロに片方の耳を切り落
とされた人の身内の者」である（18:26）。これはヨハネ18:10を踏まえたもので
ある。共観福音書でもマルコ14:47並行に見られるエピソードであるが、共観
福音書ではイエスの周りにいた人とされ、ペトロとは明示されていない。ヨ
ハネ福音書のみがこれをペトロと同定している。この事件を踏まえて、ペト
ロがイエス逮捕場面にいたことを証明しようとしているのである。
- ⑦鶏は1回鳴くが（18:27）、これはマタイ・ルカとも共通する。
- ⑧ペトロは最後に泣かない。ヨハネでは「鶏が鳴いた」というところで「ペト
ロの否認」のエピソードは終わる。つまり、ペトロはイエスの言葉（13:38）
を思い出さないし、泣くこともない。

以上のように、ヨハネ福音書の描写は共観福音書と大きく異なっている。本
小論では、ペトロに関する描き方の違いに注目してみたい。

2.2 ペトロに関する違い

「ペトロの否認」におけるペトロ描写について、共観福音書とヨハネ福音書が
大きく異なるのは次の二点である。

- (1) 冒頭において、ペトロは大祭司の庭に入れないというエピソードの付加
- (2) 末尾において、ペトロが泣く記述がない

これらについて、以下考察していく。まずこれまでの研究に関して述べておく。

(1) については、注解者は「他の弟子」とは誰かという議論に集中しがちで⁷、
この部分におけるペトロ描写の意味については考察されていない。あるいは、
ペトロと「他の弟子」との役割の違い（後者が理想的な存在）といった説明になっ
ており、ペトロ像そのものに関する説明はなされてこなかった。

⁷ 代表的なものとして、Brown, Raymond Edward. *The Gospel According to John*,
Garden City, NY: Doubleday, 1966, 822-823.

また (2) について、学術的な注解書の半数には言及がない⁸。また言及があるものでも、「無いこと」を述べるのみにとどまり、その意味に言及しているものはほとんど存在しない⁹。そもそも「無いこと」を述べることには危険が伴うが、「ペトロの否認」は共観福音書にも存在し、基本的な筋書きは共通するものであるから、比較検討によってそこに意味を見出すことに大きな問題はないであろう。

これらの点において、本研究はこれまでの研究で見落とされてきた点を考察し、ペトロ描写についての理解を深めるものである。

3. 考察

3.1 大祭司の庭に入れないペトロ (ヨハ18:15-16)

15 Ἡκολούθει δὲ τῷ Ἰησοῦ Σίμων Πέτρος καὶ ἄλλος μαθητής, ὁ δὲ μαθητής ἐκεῖνος ἦν γνωστὸς τῷ ἀρχιερεῖ καὶ συνεισῆλθεν τῷ Ἰησοῦ εἰς τὴν αὐλὴν τοῦ ἀρχιερέως, 16 ὁ δὲ Πέτρος εἰστήκει πρὸς τῇ θύρᾳ ἔξω. ἐξῆλθεν οὖν ὁ μαθητής ὁ ἄλλος ὁ γνωστὸς

8 言及がないものとして、Beasley-Murray, George Raymond. *John*. Word Biblical Commentary, Vol. 36 Dallas, TX: Word Pub, 1989; Beutler, Johannes. *Das Johannesevangelium: Kommentar*. Freiburg: Herder, 2013; Brodie, Thomas L. *The Gospel According to John: A Literary and Theological Commentary*. New York, NY: Oxford University Press, 1993; Hoskyns, Edwyn Clement, and Noel Davey. *The Fourth Gospel*. London: Faber and Faber, 1940; Keener, Craig S. *The Gospel of John: A Commentary*. Peabody, MA: Hendrickson, 2003; Klink, Edward W. *John*. Grand Rapids, Mich: Zondervan, 2016; Moloney, Francis J. *The Gospel of John*. Sacra Pagina 4, Collegeville, MI: Liturgical Press, 1998; Neyrey, Jerome H. *The Gospel of John*. New Cambridge Bible commentary, New York: Cambridge University Press, 2007; Thompson, Marianne Meye. *John: A Commentary*. Louisville, KY: Westminster John Knox, 2015; Thyen, Hartwig. *Das Johannesevangelium*. Handbuch zum Neuen Testament; 6 Tübingen: Mohr Siebeck, 2005 など。

9 カーソンは無いことの指摘のみ (Carson, D. A. *The Gospel According to John*. Leicester, England Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1991, 586)。パーナードは、ヨハネ福音書はキリスト者に語る必要のないことは省略するという傾向があると指摘する (Bernard, J. H., and A. H. McNeile. *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. John*. New York, NY: Scribner, 1929, ii, 604)。ツムシュタインも無いことの指摘のみ (Zumstein, Jean. *L'Évangile Selon Saint-Jean* (13-21). Commentaire du Nouveau Testament 4b, Geneva: Labor et Fides, 2007, 213)。

τοῦ ἀρχιερέως καὶ εἶπεν τῇ θυρωρῶ καὶ εἰσήγαγεν τὸν Πέτρον.

15しかしイエスに、シモン・ペトロと他の弟子が従っていた。しかしこの弟子は大祭司に知られていた者であり、イエスと共に大祭司の中庭に入ったが、16ペトロは外で、入り口のそばに立たされた。そして大祭司の知己であるこの他の弟子が出てきて、女門番に話して、ペトロを中に入れてやった。(私訳)

この部分について、本文批評上の問題はいくつかあるが、今回問題にする内容の趣旨に影響するものはない。ヨハネ福音書ではしばしば無名の弟子への言及があることから考えれば、このエピソードは伝承由来というよりも、福音書記者による部分であるとみなせるであろう¹⁰。そうであれば、福音書記者の考えが含まれている可能性が高いと言える。

ペトロと「もう一人の弟子」(名は明らかにされない)¹¹はイエスに従っていく。無名の弟子は「大祭司の知り合いだったので」イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入った。これは奇妙な描写である。イエスを逮捕したのであるから弟子たちも同じく捕まえられるかもと考えて(イエスの処刑後には「ユダヤ人を恐れて」(ヨハ20:19) いる) イエスとは同道しないであろう。しかもこの「他の弟子」は「大司祭の知り合い」であり、顔を知られているのである¹²。これは、この部分がヨハネ福音書記者に由来するものであることを示している。なおマルコ14:66・マタイ22:69では単に「ペトロが下の中庭にいた」と述べるだけで「従う」状況への言及はない。ルカ22:54では「ペトロは遠く離れて従った」と遠慮がちな描写になっている。

しかしペトロは入れず、門のそばで待ちぼうけをくらうのである。つまりこ

10 福音書の成立を3段階に分けて考えるウォールドは、この部分を第三段階とみなしている(Wahlde, 2:760-1)。

11 これはしばしば「愛弟子」のこととされるが、明確な根拠はない。

12 また、イエスの逮捕時に弟子たちは全て逃げ去ってしまったという点(マコ14:50並行)とも矛盾する。もっともヨハネ福音書にはそのことは述べられていないので、ヨハネ福音書内部での整合性はある。

の段階ではペトロの顔は (少なくとも門番には) 知られていないことになっている。そして先に入っていた「もう一人の弟子」がやってきて、門番と交渉してペトロを中に入れてやるという筋書きである。ヨハネ福音書独自のこのエピソードには、どのような意味が考えられるだろうか。それは「ペトロは大したことのない人物である」というメッセージであろう。ここに出てくる「他の弟子」は大祭司の知り合いであるような顔の広い人物であったが、ペトロにはそのような人脈はない。ゆえに大祭司の家の中庭にも入れてもらえない。他の弟子が交渉することによって、やっと入れてもらえた、というような、権威のない存在である、ということである。「ペトロが一番ではない」というモチーフはヨハネ福音書においてしばしば現れるが¹³、ここでもそのモチーフが用いられているのである。

つまりこのエピソードは、ペトロの地位を下げようとする福音書記者の意図を反映したものである。「ペトロの否認」というエピソードそのものが既にペトロの愚かさを示すものであるが、それをさらに強化しているといえる。

3.2 最後に泣かないペトロ

共観福音書では、このエピソードの最後にはペトロがイエスの言葉 (マコ 14:30、マタ 26:34、ルカ 22:34) を思い出して、泣き出す (マコ 14:72、マタ 26:75、ルカ 22:62)。ここにはどのような意味が存在するのであろうか。ペトロはイエスに「三度私を否定する」と言われて、そんなことはしないと強く否定していた (マコ 14:29、マタ 26:35。なおルカには否定の言葉はない¹⁴)。しかし実際にはイエスの言葉通りにイエスとの関係を否定してしまった。それゆえこのペトロの涙は、イエスの言葉通りになってしまったことへの悲しみ、あるいはイエスの言葉に

13 弟子の招集(ヨハ1:40-42; アンデレの次)、墓への競争(ヨハ20:3-4; もう一人の弟子の次)。

14 マティユは、この沈黙はイエスのこの言葉の重大さを示すものであるという (Mathieu, Yvan. *La Figure De Pierre Dans L'Oeuvre De Luc: (Évangile Et Actes Des Apôtres): Une Approche Synchronique*. Paris: J. Gabalda, 2004.153)。なおヨハネ福音書にもペトロによるさらなる否定の言葉は無く、この点ではルカ福音書と共通している。

従えなかった反省また悔恨としての涙という趣旨¹⁵であろう。

ところがヨハネ福音書にはこの場面がない。ペトロはイエスの言葉（13:38）を思い出すこともない¹⁶。ただ鶏が鳴いて（18:27）、このエピソードは閉じられる¹⁷。このことについて、二つの立場が考えられる。すなわち、（1）ヨハネが用いた伝承資料にはそもそもこの場面がなかった、（2）ヨハネは共観福音書と同じような伝承を用いたがこの場面を削除した、というものである。（1）の可能性はあるだろうか。ヨハネの方がより簡潔な形、つまり三回の否定と鶏の声で構成されていることになる。また先に見たように、ヨハネの「ペトロの否認」は共観福音書のものとは大きく異なる点が多い、ということも、この可能性を支持するものであろう。すると、そのような伝承が存在したことは十分考えられる。ヨハネがそれを用いたために、ペトロが泣く場面はなかった、ということになる。ブラウンはこの部分に関する伝承に関する議論を整理し、ヨハネとマルコ（＝共観福音書）は初期の、この物語の基本的要素を備えた福音書以前の伝承を、それぞれに用いて物語を構成したとみなしている¹⁸。

上記（1）の可能性は必ずしも否定できない。しかしながら、ヨハネ福音書に見られるこの部分の基本要素は共観福音書のものによく似ているという事実は見逃せない。前述の「門番の女中」の例から見ても、ヨハネ福音書記者は共観福音書の形の物語を手に入れていた可能性は高いであろう。であれば、仮にヨハネ福音書記者の受け取った伝承にペトロが泣く場面がなかったとしても、他

15 本論では、史実的なペトロ本人の感情というよりも、筋書きにおける意味あい、福音書記者の意図という点を考えている。

16 なおルカと同じくヨハネでも、イエスの言葉に対するペトロの反論は述べられない。

17 ヘンヒェンは、ヨハネでは物語全体が簡潔かつ淡々と述べられており、感情的な描写がないと指摘する（しかしそれ以上の解釈は述べない。Haenchen, Ernst, Robert Walter Funk, and Ulrich Busse. *John: A Commentary on the Gospel of John*. Hermeneia, Philadelphia: Fortress Press, 1984, 169）。ウィルケンハウザーも、マタイやマルコに見られる激しい描写はヨハネに欠けるという（しかしやはりそれ以上の解釈はない。Wikenhauser, Alfred. *Das Evangelium Nach Johannes*. Regensburger Neues Testament 4, Regensburg: Friedrich Pustet, 1961, 322）。

18 Brown, Raymond Edward. *The Death of the Messiah*. New York, NY: Doubleday, 1994, 610-614, esp. 613.

の伝承ではペトロが泣く場面があることを知っていたと考えられる。すると、仮にヨハネはペトロが泣く場面を削除していないとしても、積極的に書き加えてもいない、と言えるであろう。その点では、福音書記者の意図が反映していると考えることができる。

福音書記者による意図的な削除であるとする研究者は多い¹⁹。ペトロが泣く場面を入れなかった福音書記者の意図については、二つの解釈が考えられる²⁰。

- (1) プラスの方向性としては、ペトロの反省という場面を敢えて省略することで、ペトロの地位を確保しようとした、というものである。ペトロが激しく泣くという場面はペトロという人物の印象を下げるものであるから、それを省くことでペトロをより尊厳ある人物としておくことができる。
- (2) 逆にマイナスの方向性としては、共観福音書にあるペトロの涙が反省や悔恨であったとすれば、ヨハネ福音書におけるペトロは三度の否定の後にも「反省」や「悔恨」をしていない、という印象を与えることになる²¹。つまり傲岸

19 コステンベルガーは、福音書記者が削除したのは皆が知っていることを前提としているのであり、のちに21章で回復されるという (Köstenberger, Andreas J. *John*. Baker exegetical commentary on the New Testament Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2004, 520, n.44)。伊吹は「ヨハネが特にこれを消すモチーフがない場合、その伝承がなかったと考える以外ないであろう」と述べ、ヨハネには泣く場面のない伝承が伝わっていたとする (伊吹雄『ヨハネ福音書注解 III』知泉書館、2009年、294頁)。シュネツレも、ヨハネおよびその伝承はペトロの激しい感情描写には関心がなかったとし、ヨハネ福音書の記述はイエスの逮捕時におけるペトロの戦闘的姿勢との明らかな対象を指摘する (Schnelle, Udo. *Das Evangelium nach Johannes*. Theologischer Handkommentar zum Neuen Testament; 4 Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 1998, 269)。ウィルケンスは、読者は受難物語伝承から弟子たちの深い悔悛としての激しい涙を知っており、ここではイエスの強さと弟子たちの弱さが対照されているという (Wilckens, U. *Das Evangelium nach Johannes*. Vandenhoeck & Ruprecht, 2000, 276)。

20 以下に挙げたもののほかに、読者に対してイエスの言葉 (13:38) を思い出させる効果があるとする研究者もいる (Michaels, J. Ramsey. *The Gospel of John*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2010, 911; Wengst, Klaus. *Das Johannesevangelium*, 2. Auflage. Stuttgart et al.: Kohlhammer, 2009, II 229; Schnackenburg, Rudolf. *Das Johannesevangelium*. Herders theologischer Kommentar zum Neuen Testament, Bd. 4 Freiburg (i. Br.) Basel, Wien: Herder, 1965, III, 272; Lincoln, Andrew T. *The Gospel According to Saint John*. Hendrickson, Black's New Testament commentaries 4; Peabody, MA: Hendrickson, 2005, 456)。

21 リッターボスは激しく泣いたことをペトロの悔悛とみなす (Ridderbos, 584)。もし読者が

なペトロの姿を生み出すことになる。

以上、(1) (2) のいずれも解釈としては可能であろうが、ヨハネ福音書全体に見られる、ペトロの評価を下げようとする傾向²²から見て、(2) の解釈の蓋然性は極めて高いと言って良い。つまり、福音書記者は泣くペトロの姿を削除し(または付加せず)、ペトロが三度イエスを否定したにも関わらずイエスの言葉も思い出さないし、泣いて反省することもない不遜な人物として描き出そうとしているのである²³。

3.3 ヨハネ21章が付加された理由

ヨハネ福音書は1-20章がまず成立し、21章はかなり早い段階で別途追加された部分である、という点は研究者における一般的合意である。では、なぜ21章が付加されたのであろうか。20章にもすでに弟子たちへの顕現物語は存在しており、それで基本的に物語は完結している。21章を付加したのは、他にもイエスの顕現資料が見つかったので、せっかくだから付け加えた、というような単純な理由なのであろうか。それとも何かもっと積極的な理由があったのだろうか。

実のところ、21章はペトロを中心としたエピソードばかりが含まれている。21:1-14におけるイエス顕現の物語の主人公はペトロである(21:3, 7, 11)。21:15-19はペトロとイエスの対話であり、その他の人物は出てこない。さらに21:20-23は愛弟子についての話であるが、ここでもイエスと対話するのはペトロである。特に、21:15-19が「ペトロの否認」に対応しているというのは定説である。ここ

共観福音書の記述を知っていればその効果は大きいであろうし、共観福音書を知らなくとも、ヨハネ福音書の記述は淡々と終わる印象を与えるであろう(リッターボスはやはり、ペトロの否認場面全体において激しさが増していく描写がないことを指摘する。Ridderbos, Herman. *The Gospel of John. A Theological Commentary*. Trans. John Vriend. Grand Rapids: MI: Eerdmans, 1997, 584)。

22 拙稿「ペトロの召命：ヨハネ福音書伝承の検討」『関西学院大学キリスト教と文化研究』17号、2016年、83-94頁、特に93頁参照。

23 マイケルズは、福音書記者はこの物語においてペトロの感情に入り込もうとしていないと指摘する(Michaels, J. Ramsey. *The Gospel of John*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2010, 911-2)。

でペトロが3回、イエスを愛していると肯定することによって3回の否認が赦されたと解釈されている²⁴。21:1-14の顕現物語においても、ペトロが急いでイエスに会おうとする積極的な姿が描かれている。これらのペトロ像は、ヨハネ1-20章に見られるペトロの価値を下げようとする傾向とは一線を画する。

ここから21章の付加理由が推測できる。1-20章に見られる、過度に低くされたペトロ評価について、ヨハネ福音書をのちに編集した者は「やりすぎである」と考えた。それゆえに、ペトロの地位を回復するようなエピソードを集めて付加したのである。1-20章を記した著者はペトロに対して厳しい態度を取っていたが、のちの編集者はそれを和らげようとしたと言えるであろう。のちの編集者もヨハネ共同体に所属していたと考えられるが、ヨハネ共同体内部におけるペトロ評価の変遷をわれわれは垣間見ているのである。

4. 結び

ヨハネ福音書ではペトロの評価を下げようとする傾向が見られるが、「ペトロの否認」においてもそのような方向の加筆が見出された。ヨハネ福音書がペトロを嫌う理由は定かではない。ヨハネ共同体のセクト的な性格を考えれば、主流派であったエルサレム教会、またその代表者のひとりであるペトロの権威に対する反発があったのかもしれない²⁵。これは最初期キリスト教における共同体間の確執を反映したものであるとすることができる。キリスト教は最初から一枚岩の組織であったわけではなく、さまざまな考えがあり、いろいろな考え方が存在していた。ペトロ評価はさまざまに変遷していたのであり、否定と肯定の間を揺れ動いていたといえるだろう。

24 ブラウンは、機能的には、泣くことの省略は21章で償われ、ペトロには復活後に好ましい役割が与えられたという (Brown, *Death of the Messiah*, 607-10)。リンダースはこの部分の続きがヨハネの補遺である21章にあると述べる (Lindars, Barnabas. *The Gospel of John*. London: Oliphants, 1972, 552)。

25 ペトロらに対する反発はパウロ文書にも見られるものであり、ヨハネ共同体に限らず比較的良好に見られた現象であると推測される。

ヨハネ福音書におけるペトロ描写の特徴は、キリスト教の始まりの時期における歴史的状況をもほのめかしている。それは、4世紀頃に確定した現在の形の「キリスト教」が絶対的なものでないことも示すのである。